

第二章 大地の修理固成 (二二)

大国常立尊はそこで、きわめて荘厳な、厳格な犯すことのできない、すばらしく偉大な御姿を顕わし給いて、地の世界最高の山巔にお登り遊ばされて四方を見渡したまえば、もはや天に日月星辰完全に顕現せられ、地に山川草木は発生したとはいえ、樹草の類はほとんど葱のように繊弱く、葦のように柔かなものであった。そこで国祖は、その御口より息吹を放つて風を吹きおこし給うた。その息吹によつて十二の神々が御出現遊ばされた。

ここに十二の神々は、おのおの分担を定めて、風を吹き起したもうたが、その風の力によつて松、竹、梅をはじめ、一切の樹草はベタバタに、その根本より吹倒されてしもうた。大国常立尊はこの有様を眺めたもうて、御自身の胸の骨をば一本抜きとり、自ら歯をもつてコナゴナに咬みくだけ、四方に撒布したもうた。

すべての軟かき動植物は、その骨の粉末を吸収して、その質非常に堅くなり、倒れていた樹草は直立し、海鼠のように柔軟匍匐していた人間その他の諸動物も、この時はじめて骨が具わり、敏活に動作することが出来るようになった。五穀が実るようになり、葱のように一様に柔かくして、区別さえ殆どつかなかつた一切の植物は、はつきりと、おのおの特有の形体をとるようになったのも此の時である。骨の粉末の固まり着いた所には岩石がで

※地の世界最高の山巔……仏説でいう須弥仙山のことです。

※日月星辰……「辰」は日・月・星の意ですが、また星座の意味でもあります。星に神秘的な力を付託して尊崇する信仰・儀礼が古代のアラビア・バビロニア・インドなどにみられますが、ここでは天体の完成をいわれているのですね。

き、諸々の鉱物が発生した。これを称して岩の神と申し上げる。

しかるに太陽は依然として強烈なる光熱を放射し、月は大地の水の吸収を続けているから、地上の樹草は次第に日に照りつけられて殆ど枯死せむとし、動物も亦この旱天つづきに非常に困っていた。しかし月からは、まだ水を吸引することを止めなかった。このままに放任しておくならば、全世界は干鰈を焦したように燻ってしまうかも知れないと、大國常立尊は山上に昇つて、まだ人体化しておらぬ諸々の竜神に命じて、海水を口に銜んで持ちきたらしめ給うた。

諸々の竜神は命を奉じて、海水を大國常立尊の許に持ちきたった。大國常立尊はその水を手を受けて、やがてそれを口に呑み、天に向つて息吹をフーと吹き放たれた。すると天上には色の濃い雲や淡い雲や、その他種々雑多の雲が起つてきた。たちまち雲からサツと地上に雨が降りはじめた。この使神であつた竜神は無数にあつたが、大國常立尊はこれを総称して雨の神と名付けたもつた。

ところが雨が降すぎても却て困るというので、これを調和するために、大國常立尊は御身体一杯に暑いほど太陽の熱をお吸いになつた。そうして御自分の御身体各部より熱を放射したもつた。その放射された熱はたちまち無数の竜体と變じて、天に向つて昇騰していった。大國常立尊はこれに火竜神という名称をお付けになつた。(筆に書いては短いが大國常立尊がここまで天地をお造りになるのに、数十億年の歳月を要している)

尊はかくの如くにして人類を始め、動物、植物等をお創造り遊ばされて、人間には日の大神と、月の大神の靈魂を賦与せられて、肉体は国常立尊の主宰として、神の御意志を實行する機関となし給うた。これが人生の目的である。神示に『神は万物普遍の靈にして人は天地経緯の大神宰なり』とあるも、この理に由るのである。

しかるに星移り年をかさぬるにしたがって、人智は乱れ、情は拗け、意は曲りて、人間は次第に私慾を擅にするようになり、ここに弱肉強食、生存競争の端はひらかれ、せつかく神が御苦心の結果、創造遊ばされた善美のこの地上も亦、もとの泥海に復さねばならぬような傾向ができた。

しかるに地の一方では、天地間に残滓のように残っていた邪氣は、凝って悪竜、悪蛇、悪狐を発生し、或いは邪鬼となり、妖魅となつて、我侏放肆な人間の靈魂に憑依し、世の中を悪化して、邪靈の世界とせむことを企てた。そこで大國常立大神は非常に憤りたもうて、深い吐息をおはきになつた。その太息から八種の雷神や、荒の神がお生れ遊ばしたのである。

それで荒の神の御発動があるのは、大神が地上の人類に警戒を与えたまう時である。こうしてしばしば大神は荒の神の御発動によつて、地上の人類を警戒せられたが、人類の大多数は依然として覚醒しない。そこで大神は大いにもどかしがりたまひ伊都の雄猛びをせられて、大地に四股を踏んで憤り給うた。そのとき大神の口、鼻、また眼より数多の竜神がお

※地の一方……露国辺の天地の邪氣が凝つて八頭八尾の大蛇となつたり、印度に発生した極陰性の邪氣が凝つて金毛九尾白面の悪狐となり、ユダヤに発生した六面八臂の邪鬼の三悪をいふのです。

※八種の雷神……大雷・火の雷・黒雷・析雷・若雷・土雷・鳴雷・伏雷の八つ。

※荒の神……地上の人類に警戒を与えたまう時の発動、まり世の中の汚れを清めるために暴風雨を越こして清める神の使い。

※伊都の雄猛び……尊嚴な權威あるお叫び。

現われになった。この竜神を地震の神と申し上げる。国祖の大神の極端に憤りたもうた時に地震の神の御発動があるのである。大神の怒りは私の怒りではなくして、世の中を善美に立替え立直したいための、大慈悲心の御発現に外ならぬのである。

大國常立尊が天地を修理固成したもうてより、ほとんど十万年の期間は、別に今日のように区割された国家はなかった。ただ地方地方を限って、八王という国魂の神が配置され、八頭という宰相の神が八王神の下にそれぞれ配置されていた。

しかるに世の中はだんだん悪化して、大神の御神慮に叶わぬことばかりが始まり、怨恨、嫉妬、悲哀、呪咀の聲は、天地に一杯に充ちわたることになった。そこで大國常立大神は再び地上の修理固成を企劃なしたもうて、ある高い山の頂上にお立ちになって大声を發したもうた。その聲は万雷の一時に轟くごとくであった。大神はなおも足を踏みとどろかして地踏輪をお踏みになった。そのため大地は揺れゆれて、地震の神、荒の神が挙って御発動になり、地球は一大変態を来して、山河はくずれ埋まり、草木は倒れ伏し、地上の蒼生はほとんど全く淪亡るまでに立ちいたった。その時の雄健びによつて、大地の一部が陥落して、現今の阿弗利加の一部と、南北亜米利加の大陸が現出した。それと同時に太平洋もでき上り、その真中に竜形の島が形造られた。これが現代の日本の地である。それまでは今の日本海はなく支那も朝鮮も、日本に陸地で連続していた。この時まで現代の日本の南方、太平洋面にはまだ数百里の大陸がつづいていたが、この地球の大變動によつて、その中心の

最も地盤の鞏固なる部分が、竜の形をして取り残されたのである。

この日本国土の形状をなしている竜の形は、元の大国常立尊が、竜体を現じて地上の泥海を造り固めていられた時のお姿同様であつて、その長さも、幅も、寸法において何ら変りはない。それゆえ日本国は、地球の良に位置して神聖犯すべからざる土地なのである。もと黄金の円柱が、宇宙の真中に立っていた位置も日本国であつたが、それが、東北から、西南に向けて倒れた。この島を自転倒嶋というのは、自ら転げてできた島という意味である。

この島が四方に海を環らしたのは、神聖なる神の御息み所とするためなのである。そうしてこの日本の土地全体は、すべて大神の御肉体である。ここにおいて自転倒嶋と、他の国土とを区別し、立別けておかれた。

それから大神は天の太陽、太陰と向わせられ、陽気と陰気とを吸いこみたもつて、息吹の狭霧を吐きだしたもつた。この狭霧より現われたまえる神が稚姫君命である。

このたびの地変によつて、地上の蒼生はほとんど全滅して、そのさまあたかもノアの洪水当時に彷彿たるものであつた。そこで大神は、諸々の神々および人間をお生みになる必要を生じたまい、まず稚姫君命は、天稚彦という男神をおもちになり、真道知彦、青森知木彦、天地要彦、常世姫、黄金竜姫、合陀瑠姫、要耶麻姫、言解姫の三男五女の神人をお生みになつた。この天稚彦というのは、古事記にある天若彦とは全然別の神である。かくの

※稚姫君命……大神の息吹の狭霧から現われた神。国祖国常立尊の直系分霊で、大本開祖の精霊。

※天稚彦……大本開祖出口ナオの夫たる出口政五郎氏のこと。聖師さまはこの方の諡（戒名）に「説法明教信士」の名を贈られています。

※真道知彦……開祖の第三男伝吉氏。

※青森知木彦……開祖の長男竹蔵氏。

※天地要彦……開祖の次男清吉氏。

※常世姫……開祖の第三女（福島）久子さん。

※黄金竜姫……開祖の第四女（木下）龍子さん。

※合陀瑠姫……開祖の長女（天樹）米さん。

※要耶麻姫……開祖の次女（栗山）琴さん。

※言解姫……開祖の第五女出口澄子さん。

ごとく地上に地変を起さねばならぬようになったのは、要するに天において天上の政治が乱れ、それと同じ形に、地上に紛乱状態が現われ来たからである。天にある事はかならず地に映り、天が乱れると地も乱れ、地が乱れると、天も同様に乱れてくるものである。そこで大神は天上を修理固成すべく稚姫君命を生みたもうて天にお昇せになり、地は御自身に幽界を主宰し、現界の主宰を須佐之男命に御委任になった。

(大正一〇・一一〇・二〇 旧九・二〇 谷口正治録)

瑞月

大国主神に習ひて国々に

人生み行かむ経綸の爲め

秋津島曲の砦を打ち破り

渡り来りぬ神の恵みに